学位論文題名

中世末期フランスにおける王権と諸侯権

—王国の統合プロセスに関する一考察—

学位論文内容の要旨

序においては、従来のフランス王国史研究の動向が述べられ、本論文の視点および分析の方法が述べられている。従来のフランス王国史研究では、国王を中心とした集権的な体制を重視する傾向にあり、百年戦争の渦中にあった中世末期という時代は、まさに封建制から絶対王政への過渡期とみなされていた。それに対して本論文は、この中世末期こそが、フランス王国の社会・文化的一体性の起源となった時代と考え、中世末期に見られた諸侯国をフランス王国史の展開の中に位置づけ、王国の多元的な構造と国王を中心とした集権的な王国の政治体制を、有機的に結びつけて理解することを目指し、王族からなる白ユリ諸侯に分析の対象を絞り、彼らの中世末期における活動を具体的に検証する。

第1章では、本論の前提として、中世末期における諸侯権の基本的性格が明らかにされる。具体的には、諸侯層が王族に占められていく過程を跡づけたのち、諸王令に現れる諸侯の国制上の役割が析出される。ここでいう王族とは、親王すなわち王家第二子以下の王子とその継承者を指す。国王は彼らに親王領とよばれる諸侯国を授与し、これを宣言する親王領設定文書には、彼らの王国統治上の責務を記した。すなわち、親王は王国への強い忠誠心を求められ、親王領は王国奉仕を確保する権力基盤として現れる。それゆえ、中世末期の諸侯とは王国奉仕を前提に生まれた権力といえ、諸侯国は分王国的な性格を帯びていた。王家の紋にちなむ「白ユリ諸侯」という名称が、こうした諸侯権のあり方を端的に表している。また、王家に由来しない有力家門も、その一部は王家との婚姻などを通じて、徐々に王族へと昇格していった。このように王権と諸侯権の関係の基底には、王家の血を媒介とする独特の結合原理が存在したことが指摘されている。この点を具体的に論証するために、国制における両者の関係の具体的展開を、王国統治を構成する三つのレベルから検証していくことになる。

第2章では王国の地方統治に注目し、諸侯による国王代行任務が考察される。国王代行官とは文字通り「王の代理人」である。王国の財政や交通網が未発達であった百年戦争期、王権は国王代行体制を通じて行政の効率化を図っていた。国王代行官親任状は王国奉仕に伴う強大な権力を記しており、諸侯はこうした権力のもと、国王に対する二種類の奉仕を課された。第一に、諸侯国を含めその近隣を委任された場合、諸侯は分王国の維持強化という責務を負う。第二に、諸侯国遠方を委任された場合、諸侯は王国民の反税蜂起や対外戦争に対処するため、領国統治から離れねばならなかった。たとえば、最多親任数のペリ一公は、国王代行官として諸侯国、王権委任地、そして王国の中心地パリを動き回り、家門政策に割く時間を最小限にとどめられたのである。したがって、国王は諸侯が果たす王

国奉仕の見返りとして、時に諸侯国における王権行使を容認し、領国統治をバックアップしたと考えることができる。また、諸侯もこうした見返りゆえに、王国奉仕とそれに伴う王国統治権の分配を求め、国王政府への関与を深めていくのであった。

第3章では、このような観点から王国の中央統治、すなわちパリにおける諸侯の活動が考察されている。考察時期はシャルル6世期である。未成年での即位や王の精神病に彩られたこの時代、諸侯は王国統治権の分配をめぐる対立しつつも、国王政府の中樞を担っていた。しかし、こうした国王政府への深入りは王国の重大問題に諸侯を巻き込み、彼らはそこでの政策をめぐる、さらに対立を深めていく。本章では、諸侯の権力分配を法令にそって明らかにしたのち、シスマを事例として諸侯間抗争の具体相が検討される。諸侯間抗争が頂点に達したのは、1400年前後の国王政府においてである。ここでは、国王の叔父ブルゴーニュ公がシスマおよびこれと密接不可分の英仏講和に関して、平和路線を追求する。その背景として、独仏国境に拮据する広大なブルゴーニュ公国の存在を考慮することができる。公はパリでの責務に区切りをつけ、領国統治への復帰を望んだと思われる。これに対して、パリ周辺の小規模な諸侯国を治めた王弟オルレアン公は、徹底した対外的強硬路線を貫いた。このような抗争の末、1407年ブルゴーニュ公がオルレアン公を殺害するにいたり、この王族間殺害をきっかけに、王国は内戦へと突入する。ここにおいて、王家の血の結束力に支えられた王国の統治体制は機能不全に陥り、1415年アザンクールの大敗後、フランス王位はイングランドの手に渡ることになる。このように百年戦争末期を彩る王国内戦とは、パリにおける諸侯間抗争に端を発しており、その抗争の背景には諸侯国形成の問題が関わっていたとことが指摘されている。

第4章では、第2・3章の検討結果を前提として、王国の統治体制における諸侯国の位置に関して、裁判とくに上訴の問題が考察されている。諸侯法廷から国王法廷への再審を意味する上訴は、国王と諸侯の支配・服従関係を示すと同時に、王国上訴体系の中での諸侯裁判権の展開は、諸侯国の国制的位置を如実に示している。百年戦争勃発前後の諸侯国においては、その最上審として上訴法廷が創設され、それまでパリに上訴された紛争は諸侯のもとで裁かれることとなった。これによって、諸侯は国家的な統治機関を獲得したとすることができる。一方、その創設文書は、上訴法廷の創設に対する国王の積極的な関与を示しつつも、上訴法廷からパリへの上訴も依然有効であった。しかし、具体的な上訴事件の経過やその判決を詳細に分析から、この上訴体系が正常に機能したことを必ずしも確認することはできない。諸侯領民および国王裁判官がパリでの裁判を望み、頻繁に上訴法廷の管轄権を侵害していた。これに対して、国王はあくまでパリへの訴訟集中を忌避し、上訴法廷の機能維持を図った。諸侯裁判権の実働にとって、王権からの働きかけは不可欠であったのである。一方、こうした働きかけから、国王は戦争によって増大した訴訟業務を、諸侯国に分散したと考えられる。このため、国王は諸侯権への立脚を通じて、王国司法全体の凝集化を目指したということを考えることができる。このように、諸侯国は分王国として王国統治業務の一部を担いつつ、これを通じて国家化を遂げていったのだった。

結語においては、以上の考察から、中世末期の王権と諸侯権を協働および相互依存の関係から捉えることができるという点が指摘されている。すなわち、国王と諸侯は百年戦争期の王国統治を密接に連携して担う一方で、こうした協働ゆえに、両者は王国および諸侯国の支配を単独で維持することができず、相互に依存する必要に迫られた。このような王権と諸侯権の関係を基調とする当時のフランスにおいては、国王が国制の頂点として王国の一体化を目指しつつも、こうした国王支配の一端を諸侯国が担うことによって、王国は

多元性を高めていた。しかし一方、多元性の支柱である諸侯国は、王権の後ろ盾なくしては維持されえず、諸侯は国王そして王国一体化のための奉仕を求められたのである。このように中世末期のフランス国制を一極的かつ多極的な統合原理から理解することにより、王国の統合プロセス解明に新たなる展望が開けてくることが強調される。

学位論文審査の要旨

主 査 助 教 授 山 本 文 彦
副 査 教 授 栗 生 澤 猛 夫
副 査 教 授 津 田 芳 郎

学 位 論 文 題 名

中世末期フランスにおける王権と諸侯権

—王国の統合プロセスに関する一考察—

本論文は、近年のフランスの歴史学界において活況を呈しているフランス王国史研究の再検討の流れに沿った研究である。従来のフランス王国史研究では、国王を中心とした集権的な体制を重視する傾向にあり、百年戦争の渦中にあった中世末期という時代は、まさに封建制から絶対王政への過渡期とみなされていた。それに対して本論文は、この中世末期こそが、フランス王国の社会・文化的一体性の起源となった時代と考え、この時代の意義を高く評価しようとしている。

こうした問題意識のもとで、本論文は、中世末期に見られた諸侯国をフランス王国史の展開の中に位置づけ、王国の多元的な構造と国王を中心とした集権的な王国の政治体制を、有機的に結びつけて理解することを目指し、王族からなる白ユリ諸侯に分析の対象を絞り、彼らの中世末期における活動を具体的に検証する。

本論文の大きな特色として、従来のフランス史研究において別々に考察される傾向にあった王国史研究と地域史研究を組み合わせ、中世末期のフランス社会を動的に把握しようとした点を指摘することができる。王権と諸侯権の相互関係の解明に重点をおき、国王の下への集権化と諸侯国の自立化という一見すると矛盾しているように思われる現象を中世末期のフランス国制の中に位置づけた点は、高く評価することができる。この点は、今後の中世末期および近世フランス史研究においても注目されることになると思われる。

国王と諸侯の相互関係を解明するために、具体的な分析の対象として、国王代行官制と上訴制が取り上げられた。これらは今までのわが国のフランス史研究では本格的に考察されていない。この対象の設定の仕方には、歴史学的なセンスの良さを感じさせる。史料を利用しながらいねいに分析がなされ、国王代行官に関しては、特に白ユリ諸侯と呼ばれる王族の諸侯たちの活動が具体的に解明された。また上訴制に関しても白ユリ諸侯の諸侯国における実際の状況が考察され、国王と諸侯との関係だけではなく、パリの高等法院との複雑な権利関係が重要なポイントであることが明らかにされた。こうした分析の結果、国王と特に白ユリ諸侯が、百年戦争という混乱期にあって、相互補完的に活動している点を具体的に提示したことは、大きな成果である。国王が単独で中央集権化をなしたのではなく、諸侯に権力の一部を委譲しながら、全体としてパリを中心とした政治体制を組織化

したことを明らかにしており、この点は高く評価することができる。

他方、申請論文では、国王と白ユリ諸侯を血族という点でしっかりと結びついた関係と理解する傾向にあり、この点はやや問題を残している。血族であるから同一の権利意識や問題意識を共有するわけでは必ずしも無く、人間関係をもう少し多面的に複雑に把握する必要がある。また、これら白ユリ諸侯によって支配されている諸侯国内部の政治体制、諸侯に仕える役人あるいは封建関係にある各地の貴族と諸侯との関係を具体的に把握し、その上で諸侯国を王国史の中に位置づけることによって、よりいっそう説得力の増した展望を持つことができると思われる。

口述試験においても、14～15世紀のフランス王国体制の理解の仕方、中央集権と地方分権の関係のあり方、あるいはこの時代における支配の具体的な中身といった基本的な問題についてもいくつか質問が出され、本論文で述べられている「一極的原理と多極的原理の共存」という表現では、必ずしも十分にこの当時のフランス王国の体制を伝えることができないことが指摘された。

このようにいくつかの問題点はあるものの、本論文は、中世末期のフランス史を全面的に見直そうとする非常に意欲的な論文であり、またラテン語史料および古フランス語史料を十分に利用し、王権と諸侯権の関係を具体的にかつ動態的に描くことに成功している。また全体の論旨の流れも明快である。

わが国のフランス史研究において、申請論文は当該分野を切り開くパイオニア的な研究である。今後、フランス革命にいたるまでの時代も視野に入れて、大きな構想の下でフランス史を研究する重要な出発点となる論文として高く評価することができる。

以上の審議結果から、本審査委員会は、全員一致で本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。